

今週の為替相場見通し(2023年11月6日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		148.81 ~ 151.74	149.37	148.00 ~ 151.00
ユーロ	(ドル)		1.0517 ~ 1.0746	1.0730	1.0600 ~ 1.0800
(1ユーロ=)	(円)		157.70 ~ 160.83	160.32	158.00 ~ 162.00
英ポンド	(ドル)		1.2090 ~ 1.2389	1.2380	1.2100 ~ 1.2600
(1英ポンド=)	(円)	*	180.77 ~ 185.02	184.93	181.00 ~ 186.00
豪ドル	(ドル)		0.6315 ~ 0.6518	0.6513	0.6420 ~ 0.6580
(1豪ドル=)	(円)	*	94.71 ~ 97.32	97.29	96.50 ~ 98.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 為替営業第二チーム 伊藤 基

(1) 今週の予想レンジ: 148.00 ~ 151.00 円

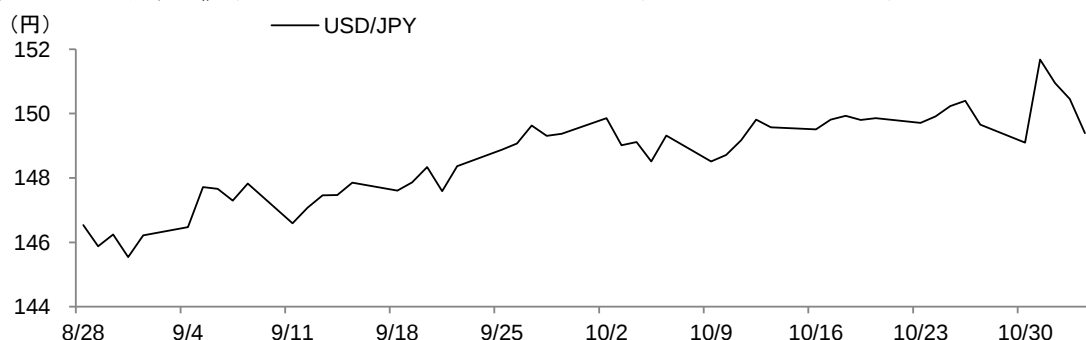
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は、値動きの激しい展開となった。週初は、日米の中銀イベントを控え、149円台半ばまでの方向に乏しい値動きとなったが、日銀金融政策決定会合でYCCについて再修正が加えられるとの報道をきっかけにドル売り円買いの流れが強まる場面が見られた。31日に公表された日銀金融政策決定会合の内容は、YCCの上限金利を事実上撤廃したものの、植田日銀総裁がマイナス金利は解除できる状況には達していないなどと述べあくまでも金融緩和を維持するとの姿勢を示した。加えて、財務省が10月に為替介入を実施しなかったと明らかになったことも材料視され、円売りドル買いの流れが強まり、151.70円台まで上昇。一方で、11月1日に神田財務官が為替介入を含めたあらゆる手段を直ちに取る用意があることを強調すると円安ドル高基調は一服。FOMCでは、2会合連続で政策金利が据え置かれた。会合後に行なわれた記者会見でパウエルFRB議長が、今後の政策判断は不確実性やリスクを踏まえながら注意深く進めるとの考えを示したことなどから、追加利上げ観測が後退し一転して円高ドル安の流れとなった。3日に公表された米10月雇用統計は、非農業部門雇用者増加数や時間当たり賃金の伸びなどが市場予想を下回る軟調な結果となり、米国経済の勢いが減速しているとの見方から米金利が低下、円高ドル安基調の流れが一段と強まり、一時149.20円台を付ける場面が見られる中、週末を迎えた。

今週のドル/円は円高ドル安基調での推移を予想する。日銀金融政策決定会合では、YCCの上限金利が事実上撤廃された一方で、FOMCでは政策金利が2会合連続で据え置かれた。FRBは今後の政策パスについて引き続きデータディペンデントの姿勢を維持しているだけに、経済指標に対する注目は今後一段と高まるであろう。そうした中、米10月ISM製造業・サービス業景況指数や米10月雇用統計は、いずれも市場予想を下回る軟調な結果となっており、景気が一段と減速するとの見方が広がりつつある。FRB高官からもこれらの経済指標の結果を踏まえて、追加利上げに慎重な意見が出てくる可能性が高いと見ており、米金利には低下圧力がかかりやすい中、ドル/円相場は、円買いドル売りの動きが徐々に強まると考える。今週は9日(木)に日銀金融政策決定会合の主な意見や、同日にIMFの会合にてパウエルFRB議長のパネル討論会への登壇、10日(金)米11月シガン大学消費者信頼感指数の公表などが予定されている。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(10/30~11/3)の値動き: 安値 148.81 円 高値 151.74 円 終値 149.37 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 為替営業第二チーム 逸見 久貴

(1) 今週の予想レンジ: 1.0600 ~ 1.0800 158.00 ~ 162.00 円

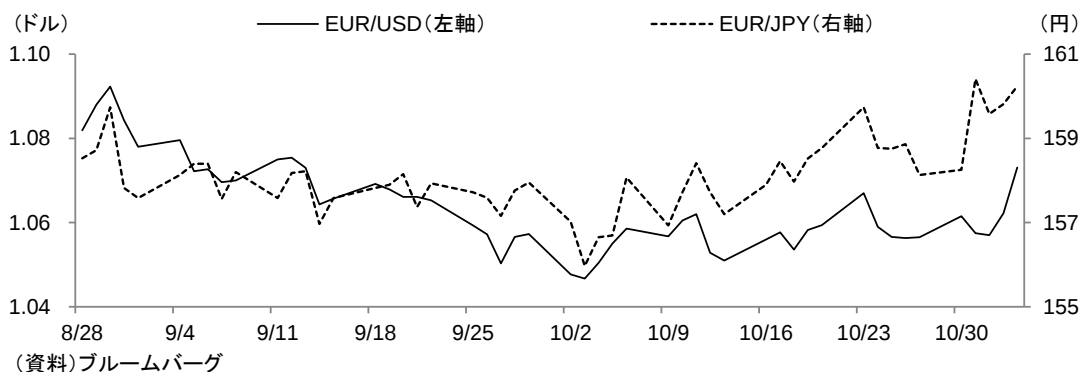
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは週末に上昇した。週初30日、1.0562でオープンしたユーロ/ドルは、欧州株高や独金利上昇に加え、イタリア国債の対独スプレッド縮小が好感され、1.06台前半に上昇した。31日、ユーロ/ドルは欧州株高を背景に一時1.0675に続伸も、堅調な米経済指標を受けた米金利上昇が重しとなり、1.05台後半に反落した。11月1日、ユーロ/ドルは独金利が大きく低下する流れに合わせ、一時週安値となる1.0517に下落した。FOMCにおけるパウエルFRB議長会見は、追加利上げの必要性が低下したことに言及するなど市場が警戒したほどタカ派な内容ではなかったものの、為替市場においてはそれほど材料視されなかった。2日、ユーロ/ドルはユーロ売りの一服を背景に、1.06台半ば付近を推移。3日、東京休場となる中1.06台半ば付近の推移が継続したが、NY時間入り後、米金利低下や欧州株の堅調な推移を横目にユーロも底堅く推移すると1.07台にのせ、週高値となる1.0746を付けた。買い一巡後も高値圏での推移が続き1.0730で越週した。

今週のユーロは横ばい推移を予想。先月のECB政策理事会では、2022年7月から10会合連続で実施してきた利上げが遂に据え置かれた。ラガルドECB総裁は、足許の中東情勢の不透明感やインフレ低下の鈍さを踏まえれば、データ次第では利上げ再開の可能性を示唆しているものの、域内経済の低迷が継続するとの見通しの下、引き締め効果を見極めるスタンスを示しており、利上げ局面は本格的に終了した様子。元々、今年の7月からハト派化するECBの動向を反映して、ユーロ安が進んできたこともあり、本会合後にユーロ安が進む展開とはならず、1.06ちょうど付近の横ばい推移を継続した。改めて金融政策や経済情勢を踏まえれば、ユーロを買い進める材料が見当たらない中、11月2日のFOMCでは事前予想ほどタカ派な結果とならず、ドル買いも盛り上がり欠ける状況下、ユーロは引き続き方向感に欠ける展開を予想。今週は7日(火)にユーロ圏9月生産者物価指数、8日(水)にユーロ圏小売売上高、独10月消費者物価指数を控えるも、ユーロ主導の値動きに発展するほどの材料とは考えてない。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(10/30~11/3)の値動き: (対ドル) 安値 1.0517 高値 1.0746 終値 1.0730
(対円) 安値 157.70 高値 160.83 終値 160.32



3. 英ポンド

欧州資金部 中島 將行

(1) 今週の予想レンジ: 1.2100 ~ 1.2600 181.00 ~ 186.00 円

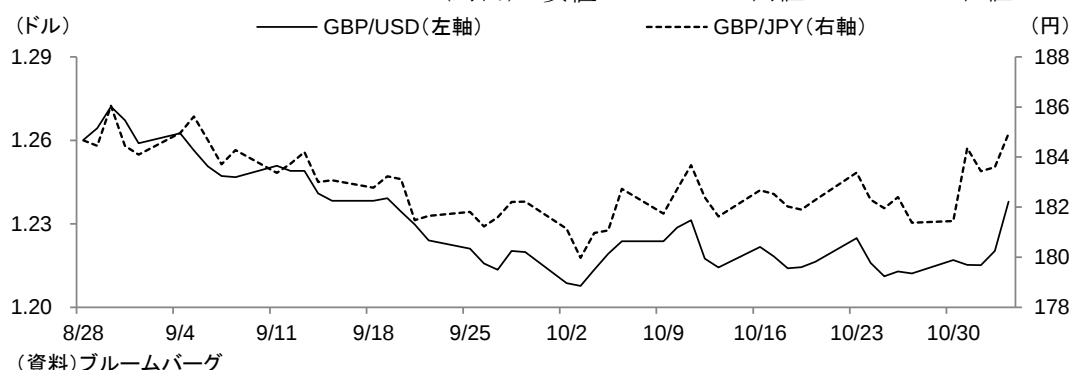
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間のポンド相場は先週末の対ドル1.2122から1.2380まで2%超上昇した。11月1日のFOMCがハト派寄りと市場で解釈されたことに加え、同じく1日に米財務省が公表した四半期定例入札の米国債発行額が予想より緩やかな増加に留まったことや、3日発表の米10月雇用統計で雇用者数が予想以上に伸びが鈍化し、失業率がほぼ2年ぶりの高水準となったことがドル安を促した。2日のイングランド銀行(BOE)の金融政策決定会合では、政策金利が5.25%で据え置かれた。金利据え置き決定は6対3であり、3名は物価上昇圧力が根強いとの見方から0.25%の利上げを主張していた。9月会合では据え置き票が5に対し、利上げ票が4とより僅差での決定だった。タカ派の論客の一人であったカンリフBOE副総裁が退任し、ブリーデン氏が新たに参加したことが影響しているだろう。ベリリーBOE総裁は声明で「利下げについて考えるのはあまりにも時期尚早だ」と強調。「利上げが功を奏し、インフレは鈍化している。インフレ率が目標の2%まで下がり続けることを確認する必要がある。今月は金利を据え置いたが、さらなる利上げが必要かどうかを注視していく」と説明した。利上げバイアスを残した形だが、短期金利市場では追加利上げが一段と後退している。同タイミングで公表された米新規失業保険件数が予想を上振れたこと、単位労働コストが下振れたことも金利低下の流れを後押ししただろう。BOEの決定自体に対するポンド相場の反応は限定的だった。対円相場でも先週末の181.37円から184.93円まで約2%上昇。ドル/円は10月31日の日銀金融政策会合でのYCC再調整後に大きくドル高・円安に動いたが、その後のグローバルなドル安の流れを受けて、1週間を通して見れば往って来いの展開となった。

今週1週間のポンド相場は、先週の米長期金利の大幅低下、ドル安の流れを引き継ぐことになりそうだ。先週の動きは、米金融政策の引き締め長期化や米国債の需給悪化観測を前提とした米景気悲観ポジションが巻き戻されたことが主体だったと思われる。米ナスダック指数は週間で6%高と、「メルトアップ」とも形容されるような大幅上昇となった。米利上げ停止観測の強まりを背景に、しばらくは米金利低下、ドル安が進む可能性がある。もちろん、市場のそうした動きが加速するようであれば、パウエル議長らFRBの当局者からそうした楽観論をたしなめる言動が想定される。ドル安の流れへの深入りは禁物であろう。英国では10日に2023年7~9月期の実質GDP成長率が公表される。BOEの引き締めの長期化などを背景に、前期比でのマイナス成長が想定される。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(10/30~11/3)の値動き: (対ドル) 安値 1.2090 高値 1.2389 終値 1.2380
(対円) 安値 180.77 高値 185.02 終値 184.93



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 安藤 愛

(1) 今週の予想レンジ: 0.6420 ~ 0.6580 96.50 ~ 98.00 円

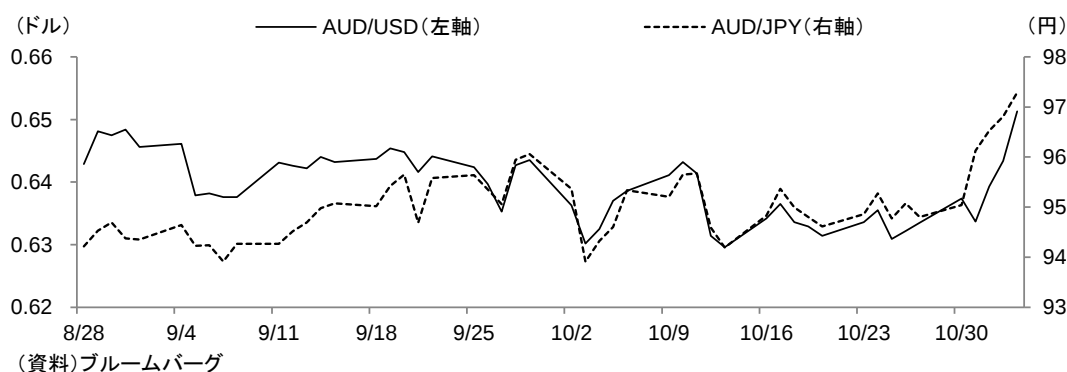
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは0.63台半ばから0.65台前半まで上昇。週初30日、0.6340近辺で取引開始後じりじり上昇し0.6380近辺で引けた。イスラエル情勢を巡るリスクセンチメントが改善した事を背景にドルが全面安となったことが相場を支えた。31日、中国10月製造業PMIが下振れたことで人民元が弱含むと、豪ドルの重しとなり0.6340近辺まで下落。一旦買い戻されたが、NY時間にかけて米長期国債利回りが再び上昇すると0.63台前半まで下落。なお、日銀金融政策会合では今後買い入れオペをやめ、YCCを柔軟化することが発表されたが、市場ではより踏み込んだ措置を見込んでいた為、失望から円売りが加速。豪ドル/円は96.17円近辺まで上昇した。11月1日、FOMCでは政策金利の据置きを決定。声明文では足許の米国債利回り上昇を受けて利上げの必要性が低下している事が示唆された。ドルは売りで反応し、豪ドルは0.64手前まで急上昇した。2日、前日のFOMCをきっかけに豪ドル買いの流れが継続。序盤に0.64台乗せた後、終日0.64台で底堅い値動きとなった。NY時間に発表された米新規失業保険申請件数、米失業保険継続受給者数が共に増加したことで、豪ドルは更に上値を追う展開となり0.6450近辺まで上昇した。3日、豪7～9月期小売売上高が前期比+0.2%増となったことで5週間ぶり高値を維持。米10月雇用統計が予想比下振れると、米債券は買いが優勢となりドルは売りで反応。株価が上昇する中、豪ドルは大きく買い進まれて0.6510近辺で越週。

今週は7日(火)RBA理事会、9日(木)中国10月CPI、同PPI、10日(金)米11月ミシガン大学消費者マインドなどが注目材料。先週発表された米10月雇用統計では、非農業部門雇用者数変化が予想比下振れた他、失業率の上昇、平均時給の弱含み等が確認され総じて軟調な結果となった。豪州では10月に発表された7～9月期CPIが想定していた程低下していなかったことから追加利上げ観測が強まり、本稿執筆時点で今週会合での+25bp利上げを57%程度織り込んでいる。利上げ終了を織り込むFOMCと対照的なRBAの状況を背景にRBA会合までは、豪ドルは底堅い値動きとなることを見込む。RBAが金利据え置きを発表した場合は、失望売りから豪ドルは再び0.63台まで回帰する可能性もあると見る。豪ドル相場の流れが変わる分岐点となる可能性が高く、RBA金融政策発表と相場の反応を注視したい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(10/30～11/3)の値動き:



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。